

反覆可能性の法

—デリダ『有限責任会社』と行為遂行性の問題—

宮崎 裕 助

ジャック・デリダの膨大な著作群にアプローチするにあたって、一九七〇〜七八年の間に書き継がれた『有限責任会社』(J・L・オースティンの言語行為論の読解を含む「署名 出来事 コンテキスト」(一九七二)、この論文に對しジョン・R・サールによってなされた批判に再応答している「有限責任会社 abc」(一九七七)、さらにはこの一連の〈デリダ⇨サール論争〉に對して寄せられた質問状への公開書簡として発表された「後記——討議の倫理にむけて」(一九八八)の三編のテキスト〔1〕を出発点に選ぶことは、それらのテキストが「論争」や「公開書簡」といった、あまり自律的でない外見——つまり「主著」とはなりえないような——を呈していることからすれば疑問がないわけではない。にもかかわらず、というよりむしろそうした外見ゆえに(この外見に含意される「寄生性」のロジックこそが、以下に見るようにそこでの主要な問いを形づくるのだが)、『有限責任会社』は、おそらく次の点において、デリダを読み始めるために不可欠な導入的価値を与えている。(一)アプローチ上の側面。デリダのいわゆる哲学史上の立場は、通常、現象学および存在論に始まる解釈学的ないしテキスト論的展開の一つと見なされている(初期のアカデミックなフッサール研究、脱構築(déconstruction)とハイデガーの「解体」(Destruktion)との緊張関係、存在論(ontologie)と幽在論(hantologie)等々)。しかし脱構築の本領が諸言語、諸ジャンル(哲

学、文学、芸術、政治、精神分析……)の横断であることを裏付けるかのように、デリダの言語行為論への介入は、「大陸哲学」と「英米哲学」という「二つの顕著な哲学的伝統の対決」⁽²⁾という見かけを喚起することで、「フランス現代思想」に関心のない哲学研究者のみならず、他の多くの読者に対して読解の場を開いてきた。確かに言語行為論は(日常言語を分析対象にすといった)性質上、むしろ現象学等よりも、固有に哲学的な専門語を組織的に駆使するといったことが比較的少ない分アプローチが容易に思われ、またその分デリダ自身の立場も尖鋭になるという利点がある。実際、三つのテキストの明らかな文体的差異(学会報告、論争の応答、公開書簡)は、その立場(の差異)を際立たせる歴史的ないし戦略的な諸コンテキストをそれぞれに記し付けるだろう。(二)脱構築のコンテキストに内的な側面。デリダ本人がこうした布置を積極的に活用している。まづもって、結果的に自らの言語論、テキスト論を特徴づけるのに主要な役割を果たすこととなった「反覆可能性」(反覆iterationは以下に見るように反覆répétitionとは厳密に区別される⁽³⁾)という概念(正確には「準」概念にとどまる)が「署名出来事 コンテキスト」においてはじめて明示的に前景化している⁽⁴⁾。そもそもデリダの言語行為論読解は「批判」「反駁」「対決」といった否定的で対抗的な企てとして受け取られるべきではなく、「返答を試みる」(86 [101])なかで「プログラムの状態にとどまっているものがある仕方限定すること」⁽⁵⁾、実際にそれを展開すべく引き受けることを目指すものであり、確かにこれを受けて七〇年代後期以降(英語圏進出以後)のデリダは、最近に至るまで、自らのキーワードの一部として言語行為論の用語(パフォーマティヴ/コンスタティヴ、発語内的ないし発語媒介的な力、使用/言及、約束/脅迫、等々)を積極的に援用している。その際これらの語が、とりわけ『法の力』(一九八九-九〇)以降顕著なように、いわゆる「倫理-法-政治的」主題系と密接に結び付くことに留意する必要がある。(三)外的な側面。こうした言語行為論の変形や再錬成はデリダや脱構築の読解の文脈に限定されてはならない。言語行為論そのものの展開は、哲学内部の文脈(分析哲学、解釈学、語用論等)だけでなく、法哲学(とりわけH・A・ハー

ト)⁽⁶⁾、言語学、文学理論、精神分析といった諸領域にも幅広く波及しており、脱構築における介入の内幕に依じて、それらの展開が蒙る諸効果を測定し、その帰結を最大限引き出すことが期待される（そもそも言語行為論の「純粋な」継承はここでの企図ではない。以下でも問われるように、それが構造的な排除によって自らの正統性を僭称する「我有化」を内包する限り、あらかじめ制限された身振りであるということ（純粹と不純の共謀関係）はそれ自体脱構築の問いの一つである（85ff. [100]）。

以上の仮設的な価値のすべてをここで逐一検討するのではなく、本論考では——紙面の制約からも——さしあたり、（二）の側面に議論を集中させることにしたい。なぜなら、他の二側面の価値を有効に評定するためには、当然ながら、それ以前にデリダの言語行為論読解が、そうするに見合うだけの内在的な理論的介入であるという前提が説明されていなければならないからである。それは確かに「介入」だろうか。だとすれば、この介入はどのようなものか。どの程度までそのようなのか。あるいはむしろ実際、どのような方向において把握されるべきだろうか。

一 反覆可能性のプロトコル

問題の核心へ手短かに接近するために、オースティン、サールに対するデリダの応答を辿って行くことはせず（これについてはすでに日本語で書かれたいくつかの論文を参照することができる⁽⁷⁾）、まずもって『有限責任会社』において再三喚起されている「反覆可能性（iterability）」という語に絞って最小限理解すべく努めよう。実のところ、これは直接に言語行為論のテキストから引き出されたものではなく、「署名 出来事 コンテキスト」においても前半部（オースティン読解は後半部）でデリダが自身の言語論の枠組みを要約的に提出しようとする際に導入されている。こうした反覆可能性を主題化する限りでは、言語行為論との関連は外在的なものととどまるおそれがあり（実際この連関は必ずしもデリダのテキストでは明らかとは言えない⁽⁸⁾）、もしそれ以上のものでないとするならば、そ

れに依じて言語行為論のもたらす積極的な諸効果は失われてしまいうだろう（後のデリダの言語行為論の積極的援用はたんなる戦略的身振りではないことになる）。だが、まさにこの関係を問うためにこそ、まずは言語行為論の問題系と混同することなくそこから独立にこの語を検討しよう。反覆可能性とスピーチ・アクト、あるいはむしろ行為遂行性との内在的連関を明確化することはその後の課題である。

そもそも反覆可能性が取り上げられねばならないのは、それが言語の非常に基本的な問い——言語とは何か、何が言語を言語たらしめているのか、何をもって言語は存在し、言語は言語と見なされるのか、等々——に答えるような言語一般の成立条件として第一に提出されているからである。デリダによれば、この反覆可能性において証示されるのは、言語には、ある構造的な不在が必然的な可能性として内属している、ということである。不在とは、当の言語を規整するはずの超越的論審級の最終的な不在、すなわち送り手、受け手、意味、意図、規則、慣習、コード、発信のコンテキスト等々の根底的不在である。どういうことか。

デリダはそのような不在においてもなお言語が存在することの限界的なケースを、次のようなエクリチュール（マーク、文字）の例を想定することによって喚起している。すなわち「そのエクリチュールのコードは秘密の暗号として二人の「主観」だけによって作り出され知られていたにすぎないほど特有な語法であるといった、そういうエクリチュール」（97[20]）を想定し、彼らが死んだ後にも（それゆえもはやその「正しい」解説コードを確かめることはできない）依然としてエクリチュールと言えるのかを問うている。「確かに、人は次の限りでそれはなおもエクリチュールであると言うだろう。すなわちそのマークは或るコード——たとえばそのコードが未知であり、また言語的でないとしても、それは問題ではない——によって規整されており、経験的に規定されたしじかじかの「主観」の不在において、したがって究極的にはすべての「主観」の不在において、そのマークのへマークとしての同一性において自らの反覆可能性によって構成されている、という限りにおいてである」（98[20]）。ここには起源におけ

る主観の（志向の）不在、主観が規定したはずのコードの不在においてもなお、言語が言語として、反覆されうる限り存在するという可能性が示唆されている（解説コードの失われた暗号、未知の異言語、古代人（または「宇宙人」「狂人」……）の文字痕跡、等々）。

反覆されるのは一見したところでは「マークとしての同一性」である。しかしいかなる先行する主観もコードも前提しない同一性とは奇妙なものだ。実のところこの記号的同一性（意味のユニット）は、読み手が自らの解説コード（読解規則）を同時に措定することで創出されたものである。この同一性はたんに恣意的ではなく、それを従わせるコードに即して、すなわち繰り返し適用可能なものとして、それにもかかわらず、同時に当のコードそのものを見出すことで可能になっている。そうしたものとしてこのマークは依然として伝達可能で、読解可能で、解釈可能である（ゆえに言語は存在する）。したがって、この場合、その「正しい」解説コードをアプリオリに前提できない限りで、むしろコードは失われたのでも隠されているのでもなく、「構造的に秘密であるようなコードは存在しない」（Ibid.）とさえ見なされねばならない（でなければいかなる翻訳も存在しない）。しかし他方その限りで、つねにこの同一性は構成されると同時に限界づけられ、安定化されぬまま損なわれてしまう。要するに反覆可能性とは、いかなる同一性からも独立して不在そのものにおいて、反覆するという最小限の再認可能性であり、これは言語の同一性を反復可能にするコードそのものをその都度同時に自己措定しつつ当の同一性を構成する（すなわちまた再破壊し脱構成する）という条件、つまりは同一性の可能性の条件であると同時に不可能性の条件なのである。

もちろんこのような限界ケースにおける言語の成立が、いわゆる通常のコミュニケーション状況（受け手と送り手が理念上現前しており、互いの意図、意味、メッセージをすでに規約的に共有された言語的手段や媒体によって伝達する、等々の想定）に対する反証を提供していると言うだけでは十分ではない。前述の不在を限界ケースに固有の事態と見なす限り、通常の（理念化された）コミュニケーションでは捨象されるべき偶発事として困い込むこ

とはつねに可能だからである。だが、そもそも限界ケースを「限界的」と規定したまま「通常の」場合から区別するという想定は維持しうるものなのだろうか。エクリチュールのこうした構造がいったん認められるならば、この不在をたんなる偶発的な経験的不在としてではなく、書かれた言葉であれ話された言葉であれ、言語一般を機能させるための積極的な条件を成す構造的不在として検討する余地が残されている。

確かに「通常ケース」の場合、個々の言語的要素（音調、声、インク、等々）が経験的には多様な現象形態を持つにも関わらず、そこに貫通する一つの形式的同一性（種々のトークンを統一するタイプ）が同定されることで言語は反復可能であると考えられる。この場合の反復はむしろ言語を規約的に組織している諸コード、それらを同定することのできる言語運用者の発語能力（コンピテンス）、あるいはそれらを賦活する主観意識の志向性、さらにはまた、そうした諸審級が相關的に織り成すコンテクスト、等々に基づいている。その限りでは不在そのものにおいて反復することなどありえず、こうした超越論的審級がつねに言語の反復可能性を統御しているということになる。もちろんこれでは「限界ケース」は説明できない。しかし、だからといってそれはたんに「通常ケース」に対置されるのではない。デリダは決して、そうした審級をそのものとして直接批判したり、斥けたりしないだろう（ここがデリダ理解の非常に誤解の多いところだ）。例えばデリダはこう問うている。「発信者あるいは受信者の現前という（見かけ上の）事実、不在がマークの機能のなかに必然的に自らを書き込む限りにおいて、ある不在の可能性によって複雑化され、分割され、汚染され、寄生されているのではないだろうか？」（97[108]）このとき考慮されているのは、規約性や志向性といった諸審級の古典的な要請の不可避性にもかかわらずそれらを必然的に媒介するという不在の構造的可能性、つまりむしろ、いかに不可避的であるとしてもそれらがつねに不在の可能性において機能していること、あらかじめ不在の可能性によって限界づけられることによって構造化されているということである。

説明しよう。繰り返すが、ここで問われているのはそうした諸審級の経験的不在ではない（不在の可能性と言わ

れていることに注意)。より一般的な次元を喚起するならば、実際、コミュニケーションが可能であるというとき、そのための最低限の規約は、一個の完結した体系的全体において十全に現前させうる必要はなく、また経験的にも確定不可能と思われるが（そもそも「最低限の規約」をどこに見出したらよいのか、例えば辞書と文法書によってコミュニケーションが生ずると見なせるのだろうか、また一つの辞書は完結しうるだろうか、等々）、たとえ有限な規約のリストを人工的に作成するにしても原理的にその作成のための規約、適用のための規約といったメタ規約がつねに要請されざるをえず（クリプキが取り出したワイトゲンシュタインにおける規則随順のパラドックスを想起できる⁽⁹⁾）、結局のところコミュニケーションや言語体系の確実な基礎としては、いかなる解釈にも還元されない規則の把握⁽¹⁰⁾、「権威の神秘的基礎」（モンテーニュ・パスカル）⁽¹¹⁾が一つのアポリアとして立ち現れざるをえない。これは、超越論的審級として確定可能な規約の根源的な不在（無根拠）を可能性として含み込むことなくしてはいかなる規約であれ機能することができないことである（前述のように反覆可能性はまさにそうした機能の条件である⁽¹²⁾）。また規約を賦活し規整する意図＝志向（およびそれによって中心化されたコンテキストの全体性）を想定したとしても事態は変わらない。デリダ自身、意図＝志向の概念をむしろ「本質的」と見なした上で、意図＝志向がその表現における「充実性を不可避的に目指すにもかかわらず、それでもなお必然的に達成しえず、かつ達成してはならないもの」として、意図＝志向のテロスに対する構造的説明を与えている。すなわち、「充実性は意図＝志向のテロスですが、そのテロスの構造とは、意図＝志向がこのテロスを達成してしまえばそれらは共に消失し、互いに麻痺し、動けなくなり、死んでしまうというものなのです」（233）。テロスの達成とは端的に「死」なのであり、むしろその達成不可能性、終わりの不在においてこそ、意図＝志向の運動は駆動し、生き続ける。結局のところ「このような終わりのなさば、意図＝志向の目的論的本質の外在的残滓ではなく、最も内密で最も還元不可能な他者として、他者そのものとして、その本質に、その本質において帰属しているのです」（234）。

問題はあくまで不在が可能性として機能しているその構造である。「通常ケース」の通常性（つまりは意図や規約といった超越論的審級の権能）は、こうした不在の機能に媒介されることでこそ主張されている。そのような不在の可能性として露呈させる限りで、むしろ「限界ケース」はたんなる補足、追記、例外に押しやられるべき偶発事であるどころか、逆説的にも「通常ケース」を範例化するのだと言わなければならない。実のところ、デリダの脱構築の身振りを一貫して動機付けているのは、このような目的論的に本質化された価値（意図の充実、規則随順の一致、コンテキストの飽和、等々）が、それによって排除された従属的価値を自らの内在的な構成要素としてつねに必要としており、その限りでこの「本質」（現前、同一性、内部……）があらかじめ「非本質」（不在、差異、外部……）の可能性によって穿たれ、分割されることではじめて機能しているという過程を論証し続けることである。不在の構造的 가능성을考慮に入れたこうしたエコノミーの分析は、規約であれ意図志向であれコンテキストであれ、それらの価値を規範化し階層化することで体系化される伝統的な言語理論の構築がつねに到達されぬものとして構造化されていることを示すだろう。不在における反覆と言うことで主張されるのは、言語のアイデアの同一性を規整する諸審級をそれ自体として破壊したり否定することではなく、それらの機能を古典的な要請の必然性においていったん受け容れた上で、同一性の生成と解体の二重化のプロセスを通じ、それらの審級が抱えている目的論的な構造的限界、さらにはこの構造を条件付けている倫理・理論的決定を暴き出すことなのである。理論的言説は、注意すれば避けられたような偶発的な論理的不整合によってではなく、まさに厳密に理論的であるからこそ、ある倫理的命令（一定の形而上学的価値を序列化し階層化することで当該の理論を理論として組織する命令）を内在化している。かくして「反覆可能性の構造は、内部と外部との境界線の単純性、諸項間の継起もしくは依存の順序＝命令を掻き乱し、排除の手続きを禁止する（それを妨げ、不当なものとする）。それが反覆可能性の法である」（[161]）。

こうしたことからしかし、反覆可能性のあくまでも両義的な性格が帰結するだろう。「同一化する」反覆可能性なくしてはアイデア化はなく、しかし同じ理由から（他化する）反覆可能性ゆえに、純粋なままで全ての汚染を免れたアイデア化というものもない」（217）。反覆可能性が同一性の可能性の条件であると同時にその不可能性の条件と言われるのはこの意味においてであるが、まさにそれゆえにこそ自らが条件たることの根源性を失効させざるをえない。「根源は、根源としての価値を有し自己維持するためには、根源的に自らを反復し他化＝変質させねばならない」（反覆可能性のパラドックス）⁽¹³⁾。実のところ、同一物の反復ではない反覆ということを説明するのに「不在そのものにおいて反復するという最小限の再認可能性」や「同一性を反復可能にするコードそのものをその都度同時に自己指定しつつ同一性を構成する」といった言い方は、反覆をそれ自体として説明しているというよりも、あくまでイデア的反復との関連で、その逆説的な限界における還元不可能な残余として遡行的に示すにすぎない。つまり事態そのものとしてはあらかじめ再マーク化された (re-marqué) マークがつねにすでに指摘されている (re-marqué) だけで、結局は、何が反覆されるのか、なぜ反覆するのか、といった根本的な問いには決して答えることがないのである（もしデリダの「示差的なマークの非現的残遺」(32 [24]) という言葉をその答えと見なすとすれば、この奇妙な造語（残遺 *restance* 「残余＝抵抗、再＝存立」）が要請された困難を理解しないことになる）。「反覆可能性と呼ばれる何ものかについて語るためには、我々はそれを名指し、同定し、記述せねばならず、そうすることであたかもそれが一つの対象であるかのように扱わねばならない。換言すれば、我々はそれを、それ自身が疑問に付しているはずの仕方で把握せねばなくなる」⁽¹⁴⁾。かくして反覆可能性はそれ自体としてはアポリアであり、意味内容を持たない準概念にとどまる。それは究極的にはまさに誤解されることでしか理解されないのである（「有限責任会社 abc…」における「ミス」タイプの仮説 (81 [97]) を想起しよう）。だからこそデリダはサールを直接批判せず、「署名出来事 コンテキスト」がその効果においてむしろ命中し [toucher] 理解されたとさえ言うのだ (89

[100]。その感觸がなければ、「有限責任会社abc」のようないびつなまでに膨れ上がったテキスト——「舌なめずりせんばかりに、相手を文字通りまるごと呑み込み体内化することに「快樂」を覚え、それによって肥え太ってゆく一種の怪物」⁽¹⁵⁾——が喚起されることはなかっただろう。

二 行為遂行性から遂行可能性へ

言語の超越論的審級における不在の構造的可能性は、それを説明するかにみえる概念（反覆可能性）の自己複雑化をも解消不可能にする。このことが要請しているのは、決して「蒙昧主義」(216, 257ff.)への撤退などではなく、いかなる立場からであれ、こうしたアポリアを一定の倫理・目的論的諸契機として内在化させることによって当の「理論的」決定が為されているのだということへの最低限の認識である。言語行為論が、脱構築がそうと名指される以前において切り開いていた分析の空間は、まさしくこのような認識を可能にする次元として示されることになるだろう。言語行為論と反覆可能性の議論との内在的連関を明確化し、この連関においてオースティンや言語行為論のテキストの全面的な再読を準備するために、ここでは暫定的にはあるが、次のような方向を素描することができ。

(一) 全面的スピーチ・アクト。オースティンが自ら「哲学史上における最も偉大で、最も有益な革命」(HW, 3[8])⁽¹⁶⁾と呼ぶことも辞さない言語行為論の要点とは、まずもって、文一般の機能の条件を規定するにあたって、事実確認的（コンスタティヴ）／行為遂行的（パフォーマティヴ）と呼ばれる区別を導入したことにある。すなわち、文の役割が、真偽のいずれかにおいて事実を記述するような陳述文（事実確認的言明）の役割へと還元されるべきものとする従来の想定を「《記述主義》的誤謬」(HW, 3[7])として斥け、そこには還元不可能な次元、つまり「文を発することが当の行為を実際に行うことにはかならない」(HW, 6[11])のような次元、言及内容が言及行為その

ものによって構成されるパフォーマンスな次元を分離することである（「私は約束する」等々）。しかしここで注意しなければならないのは、事実確認的／行為遂行的という区別の非対称性である¹⁷⁾。そもそもこの対立は文の集合全体を相互に排他的な二つの言明群に分割するものではなく、文の統辞形態からは識別不可能である（『野原に牛がいる』という発言は、警告であるかもしれないし「……」たんに風景を描写しているだけかもしれない」HW, 33 [56]）。この区別を決定するためには「発言が行われている全面的状況」（HW, 52 [91]）（諸々の習慣＝規約やコンテキストの全体）を考慮する必要があるとオースティンは述べているが、もちろんそのような全体性はそれ自体が分析を要する個々の文の集積から出発して考えるほかはない以上、部分全体の循環において問題は先送りされにすぎない。しかし少なくとも確かなのは、陳述がそれ自体他にも数あるうちの行為の一つであり、それゆえ陳述の真偽が、語の意味だけに依存するものではなく、いかなる状況でいかなる行為を遂行しているかということにも依存する」（HW, 145 [242]）からには、まずもって、記述のないし事実確認的な次元をそれ自体発語行為として構成するパフォーマンスの構造を想定しなければならないということ、このような状況の全体性が「全面的スピーチ・アクト」（HW, 52 [91]）として捉え直されるべきであるということ、結局のところ、そうしたコンスタティヴ・パフォーマンスの連鎖そのものを非規約的な仕方で根源的に指定するような純粋な「原初的パフォーマンス」（HW, 69 [121]）へと遡行せねばならないということである。

（二）発語内的諸力。あらゆる発言のうちにその機能の条件として遍在する行為遂行性の次元の発見に应じて、オースティンは一つの発語行為に対してさらに二つの機能、すなわち当の発語行為のうちで遂行されるもう一つの言語行為たる「発語内行為」（約束、命令、宣言等々）と、その遂行によって受け手に一定の効果を及ぼそうとする「発語媒介行為」（受け手の感情等々を実際に引き起こす）との二つの相を区別することを提案し、より一般的な言語行為論の構築にむけて『発語内的諸力（illocutionary forces）』の学説（HW, 100 [173]）を見出した。デリダはま

さにこの「力」の喚起のうちに、古典的な真理概念（アデクワチオおよびアレーティア）から免れることによって「一つの状況を産出ないし変形する」（37[28]）パフォーマティヴの構造を認めていたように、我々はここに反覆可能性と行為遂行性の並行性を説明するための手がかりを指摘することができよう。というのも、言語に内属する不在の構造的可能性とは、実際、発語内的な力そのものだからである。これは、パフォーマティヴな言明の自己反照的かつ自己言及的な性格、自らがその都度構成する特異な現実を指示するという性格から理解される。エミール・バンヴェニストが指摘したように、そもそもパフォーマティヴの遂行的本質とは、それが固有の一回性において発せられるということである。ある遂行的言表は、例えばオースティンが分類したような特定の「遂行動詞」の形態に基づいて成立するのではなく、むしろそれからは独立したまま「一度かつ一度限り、定められたある時と場所という特定の状況のもとにおいてしか実現されえない。それは描写の価値でも、規定の価値でもなく、（……）実行という価値を持つているのである」¹⁸。繰り返すが、パフォーマティヴの成立は文の統辞形態に依存しない。それが一個の行為たりうるのは、それ自身が作り出されるところの唯一の状況における出来事を自ら作り出すことによつて、出来事となるからである。この唯一性、一回性がなければ、いかなる言明も空虚な形式にとどまり、それが特定の状況で実際に「何事かを為す」ということはないだろう。にもかかわらず、この一回的な出来事が出来事として同定されるためには、この一回性がそれ自体つねにすでに反覆可能な形式において媒介されていなければならない。もちろんそうした形式をコンテクスト上の諸々の規約として相対的に規定しているはずの「全面的状況」は、それ自体、我々が問うている当のものに依存している。発語内的な力は、「全面的状況」たるパフォーマティヴ・コンスタティヴの連鎖それ自体を反覆可能な形式として創出する原初的パフォーマティヴの力である。事後的にしか見出されないこの形式をあらかじめ措定しつつ、それに照らして自らの特異な出来事を成立させる自己定立的な機能こそ、パフォーマティヴに固有の「自己指示＝参照的（*sui-référentiel*）」¹⁹性格なのである。この自己指示性

より一般には自己反照性は、しかしながら一つの自己触発的な基体、完結した自律性として積極的な意味で受け取られるべきではなく、反覆可能性と同様、あくまで不在の可能性によって構造化された機能である。なぜなら、発語内的行為はそれ自体としてはトートロジー的な自己言及に帰着するがゆえに、そこに不在の可能性を含み込むことでしか、諸状況において反復可能な価値を持つ（つまり指示的な力を持つ）言語存在として自身を指定することはできないからである。それ自身が不在の可能性（純粋な現前の不可能性）に媒介された指示作用は、それ自身の言い表す指示と自らの条件への指示とに内的に分裂したまま決して噛み合うことがない（おそらく我々はここに原初的パフォーマティヴに固有の根源的な「遂行論的矛盾」——もはや「矛盾」という語が適切であるかどうかはともかく——を見出す⁽²⁰⁾）。いわば「一個の発言が意味しているもの以前に、それが意味していること、を意味する」⁽²¹⁾というこの二重性（言明存在と言明内容、発言の *factum* と *dictum*）の距たりのうちに発語内的な力が書き込まれているのである（これはデカルトのコギトの構造にも類比的である⁽²²⁾）。

（三）**根底的政治化**。しかしながら、このようにパフォーマティヴの両義的性格を統合する発語内的な力の作用をそれ自体として一元的に見出す限り、以上の議論はあくまでもフィクションにとどまるだろう。力は、あくまで不在の可能性としてのみ思考されねばならない。デリダも「後記」のなかで「権力や力と名指される当のものは決して存在せず、ただ権力の差異および力の差異が、量的であると同様に質的であるところの諸々の差異だけがあるのだ」という事実を考慮すること⁽²³⁾を強調しているように、パフォーマティヴの力は、所与のコンテクストにおいて示差的に規定された諸々の指示的決定から遡るのでなければ、それ自体としては何ものでもない（たんに神秘的な実体Xでしかない）。反覆可能性の概念が不可避的な自己複雑化を経なければならなかったのと同様、行為遂行性の概念は、あるスピーチ・アクトが抽象的ではなく実際に成立するという限りで（経験の根底的な還元不可能性）、その効果において既得の事実確認的言明から事後的に規定されるということによって、不純なまま把握されるほか

はないのである。しかしながら、逆にその不純性ゆえに、行為遂行性は、「所与」「既得」「自明」と見なされたコンテクストや慣習性、社会性に必然的に関与することができ、そこに介入しそれらを動揺させ変形する契機を自身の発語内的な諸力として与え続けるのである⁽²³⁾。

いかなるパフォーマンスの成否も一定の事実確認的言表として述定されざるをえず、このコンスタティヴそれ自体もまたつねにすでに行為遂行性によって媒介されていたことで再び変形を蒙らざるをえない。そうした意味では、成功したパフォーマンスなど存在しない。繰り返せば、より厳密に言って、パフォーマンスはそのものとしては存在しない。「それは、おそらく存在しない」ということ、[*quelle n'existe peut-être pas*] (36 [27]) と、デリダは「署名 出来事 コンテクスト」のなかでエクリチュールをその反覆可能性ゆえに存在論的言説の二者択一から免れさせるべく記していた (156 [151])⁽²⁴⁾。一個のパフォーマンスもまた存在／非存在の対立はもちろん、成功／不成功、適切／不適切、幸／不幸といった対立のなかで最終的に規定されることがない。それは存在しないだろう、おそらく。しかしそのようなものとして、おそらく存在するだろう、あるいはむしろ「何事かを為す」だろう。「おそらく (peut-être)」とおそらく言うことができるだろう——可能存在としてのこの様相を自己言及的な言表で強調しなければならぬのは、まさに行為遂行性のパラドックスゆえにある、すなわちパフォーマンスの存在がその非存在の可能性によって媒介され、成功したパフォーマンスがその失敗の可能性によって媒介されていたことで、成功した遂行はつねにその遂行の失敗の遂行へと転じうるからである。デリダが別のところで記していた言葉を借りれば、パフォーマンスは倒錯遂行的 (perverformative) である⁽²⁵⁾。パフォーマンス／コンスタティヴが入れ子状に規定し合うエコノミーの無際限は、「おそらく」の様相において、完遂されないスピーチ・アクトの決定可能性を露呈させると同時に、自身のプロセスがこの様相を条件として規整される有限性であることを自ら告げている。パフォーマンスの達成を宙吊りにしつつ「おそらく」と述べることでこの様相が指し示すのは、パフォー

マティヴが出来事として介入する位相、つまりパフォーマンスが自己反照的に規定し規定される円環を切断しこのエコノミーを再決定する契機なのである。もちろん「おそらく」と言われている以上、この円環の外部に立つことはそれ自体不可能であり（円環の外部とは定義上つねに円環に内化される〈内部の外部〉である）、当の出来事や再決定の内実をあらかじめ計算したり予見することは問題にならない⁽²⁶⁾。事実上ここで要請されているのは、徹頭徹尾、事実確認的言表においてこのエコノミーの体制を可能な限り厳密かつ緊密に辿り直し続けることであり、そこで争点となる賭け金を当の体制が麻痺するに至るまで、その内側から誇張法を以て競り上げることなのである——おそらくは倒錯遂行的に。

可能性としての行為遂行性(遂行可能性 *performability*)が以上のように素描されるとしても、そこに含まれた諸問題について、オースティンのテキストそのものはいまだ検討されるべき大きな余白を残している。一方においてオースティンは「パフォーマンスの純粋性」(*HW*, 150 [251])が維持できないことを正当に明言しており、実際「発語内的諸力」そのものを考察の対象にすることはない。他方そこからオースティンが目指すのは「明示的な遂行動詞」の分類を経て「発語内的諸力のリスト」(*Ibid.*)を枚挙する方向である。しかし、このような自身の分析対象を見出してくる言語行為論そのもののパフォーマンスの身分が問われなければ、つねに当の「理論的」言説は「それが分析すると主張する対象そのものの内に包含され、そこで〈部分決定〉したりされたりするものとして現れる」(136 [136]) (「有限責任会社 abc」における「セット」タイプの仮説。デリダは集合論のパラドックスに言及している(231))。したがってその限りでは、言語行為論はその方法論的前提のうちに、自らが問うべき分析対象の行為遂行性を密輸入してしまうのであり、「所与の倫理によって与えられた倫理的諸条件を再生産することになる」(231)。このような意味でオースティンが、分析の開始にあたって、発言の「不真面目で」「変則的な」「隠喩的」用法を、「真面目で」「正常な」「字義通りの」用法に寄生している、と見なすことで自らの研究対象から排除したという

こと（いわば真面目さの所以を真面目に問わないことの不真面目さ、つまりは言語行為論自身の行為（倒錯）遂行性）、そしてそれをデリダが、すでに述べた身振り（テキストのエコノミー分析）を通じて問題化したということ——言うまでもなくそこからサルトルとの論争が始まったのだが——こうしたことを通して『有限責任会社』において繰り返し事実確認的言表として示されるのは、どれほどまでに「暴力が、政治的なものであれ他のどんなものであれ、諸々のアカデミックな討議や知的論議一般のうちに作動している」（203）のかという刻明な記録、「アカデミックな討議のコードのもとに隠された（哲学的、倫理的、政治的）公理系を読まれるべくする」（205）というそれ自体執拗なまでの試みである。

デリダのテキストが、形而上学のそうした倫理目的論的閉域を限界画定しようと企てるものではあるにせよ、行為遂行性の構造的な不純性ゆえに、そのテキスト自身もまた決して中立ではありえず、したがってそこに書き込まれたもう一つの倫理性、別の行為遂行性が読み取られなければならない。確かに『有限責任会社』においてそれだけに選ばれている「寄生的」文体は、それゆえに特異なパフォーマティヴにおいて再読されうるし、されるべきである（デリダ自身それをある程度意図しており、その文体を「二重のエクリチュール」（206）と呼ぶ）。しかし繰り返し強調しておけば、脱構築の関心は、ある倫理に突き付けられる対抗倫理、ある暴力に突き付けられる対抗暴力、等々をそのものとして提起することではなく、むしろつねにそうした二項対立の両極が弁証法的に強化し合うエコノミーの分析に向けられる。デリダであれ、オースティンであれ、言語行為論であれ、脱構築であれ、そうした名のもとに置かれたテキストをこのような倫理性のエコノミーの外で読むことはできない。このエコノミーはつねに分析を必要としているが、少なくとも行為遂行性、反覆可能性は、それがこうしたエコノミーを中断し変形し再開始する構造的契機のための諸条件であるということを教えている。我々は、内在的な外部を告知しているこのよ

うな条件のうちに根底的政治化と呼ぶべき契機を見出すだろう。それは、いかなる倫理学も政治哲学も成すものではないが、ある哲学の政治、理論の政治、思考の政治といったものを露呈させるための不可欠な礎石である。それゆえ以後、当面続行されなければならないのは、この契機との主題的かつ理論的な関連において、まずもって『有限責任会社』⁽²⁷⁾、他の言語行為論のテキスト（オースティン、サール、グライス……）だけでなく、また『有限責任会社』以降、もはやほとんど言語行為論に「言及する」ことなく積極的に「使用する」ことによって、とりわけ「倫理・法政治的」主題をより明示的に論じ始めたかに見える近年のデリダのテキスト（『法の力』、『マルクスの亡霊たち』、『友愛の政治』、『信仰と知』等々。私の考えではこうした「変化」はポール・ド・マンの役割が決定的に思われる⁽²⁸⁾）、あるいはそうしたテキストに関わるあらゆるテキストを、それらの組織するエコノミーを自ずと変形し複雑化せざるをえないまでに、尊重し読解する作業だということになるだろう。

註

- (1) Jacques Derrida, *Limited Inc., Galilée*, 1990. 以下、丸括弧内の数字のみのものは本書頁数を挙げる。「後記」を除く邦訳は『現代思想』一九八八年五月臨時増刊号（169）を参照し、「」に頁を付記する。また引用での強調は原文に従う。ちなみにこれら三つのテキストの初出時の言語は、それぞれ、仏語、英仏語同時、英語であり、「後記」の初出となった英語版単行本（*Limited Inc.*, Northwestern University Press, 1988）は、仏語版より二年先行している。こうしたことは、このテキストのコンテキストがもつ重層性を考慮する上で銘記されてよい。
- (2) John R. Searle, "Reiterating the Differences: A Reply to Derrida," *Glyph* 1 (1977), p. 198. 邦訳、前掲『現代思想』七二頁。なお、デリダの「有限責任会社abc」に対する再批判として最終的に位置づけるべきかどうかは疑問の余地があるが、サールはこの論争に関連して後に二つの文章を発表している。"The Word Turned Upside Down [A review of Jonathan Culler's *On Deconstruction*]," *New York Review of Books*, 27 Oct. 1983, pp. 74-79, reprinted in *Working through Derrida*, ed. Gary B. Madison, Northwestern University Press, 1993, pp. 170-183; "Literary Theory and Its Discontents," *New Literary History*

- 25.3 (1994), pp. 637-667, reprinted in *Beyond Poststructuralism: The Speculations of Theory and the Experience of Reading*, ed. Wendell V. Harris, Pennsylvania State University Press, 1996, pp. 101-136. 前者については「後記」においてデリダが質問状の喚起に応じて詳細に反駁を加えている（とりわけ *Limited Inc.*, pp. 222ff., pp. 257n）。それを受けて後者は「サールのデリダへの再応答を含んではいるが、そこでのサールは、依然としてデリダを「ある種の伝統的なウイトゲンシュタイン以前の言語観」（p. 639）に与している者と見なす（前者の記事では「論理実証主義」と呼んでいた）ことで非難し続けている。
- (3) ここでいまだ定訳の存在しない *iteration* に対し、反復 *répétition* と区別するため、「反復」という語を充てることを明示的に提案しておきたい（ちなみに「有限責任会社 abc」の高橋・増田訳では「*répétition* || 反復、*iteration* || 〈反復〉」のように括弧を付すことで便宜的に区別されていたにとどまる。前掲『現代思想』一八三頁参照）。「反復」は「*différence* と *différance*」のような同音異字語によるエクリチュールの問いを喚起するだけでなく、漢和辞典によれば「反復を包摂する多義的な語」という点でも示唆的である。「①もとにもとず。もどす。また、もとにもどる。もどる。②くりかえす。反復。③そむく。うらぎ。また、意志や言行のさだまらないこと。④くつがえす。またくつがえる。⑤うらがえす。⑥往復する。⑦あがりさがりする。軒輊」。『大漢語林』大修館書店、一九九二年、二〇九頁（強調引用者）。『有限責任会社』によれば、*iteration* は「サンスクリット語で「他」を意味する *itara* に由来しており、「反復を他者性に結び付けるロジック」（27 [20]）に関わっている。「反復」の多義性を利用するならば、例えば次のような説明が可能だろう。*iterable* は「同じものの同一性が他化において、他化を通じて、他化を目指して」（105 [113]）自らのイデア的同一性をくつがえしつつ反復される構造を指し示しており、したがって「アプリオリにそれ自身の同一性を分割し」うらぎるものである、等々。
- (4) それゆえ初出だというわけではない。*iteration* という語そのものは、例えば『グラマトロジー』においてもすでに用いられている。Cf. *De la grammatologie*, Minuit, 1967, p. 298.
- (5) 「署名 出来事 コンテキスト」の講演の後に行われたリクールらとの討議におけるデリダの発言。前掲『現代思想』六一頁。
- (6) 最近出版された次の書物は、今世紀の法哲学におけるケルゼンやハートに始まる流れを「法の自立性」と「言語論的転回」という主題から一貫して整理することによって、デリダの『法の力』をも視野に収めながら、明快な見取り図を与えている。中山龍一『二十世紀の法思想』岩波書店、二〇〇〇年。
- (7) 例えば次を参照。高橋哲哉「言語・行為・意識——デリダのオースチン批判についてのノート」『アカデミア・人文社会科学編』四三三号、南山大学、一九八六年、一九二〜二一八頁。野家啓一「言語論的現象学」の可能性と限界——オースティンとデ

リダースール論争』『言語行為の現象学』勁草書房、一九九三年、二七三―二九八頁。なお、両者の間には注目すべき対立が存在している。議論の先取りを含んでしまうが、簡単に見ておこう。野家がこの論文の結論部で「慣習」のもつ歴史性、すなわち歴史的に生成し、伝承されたものとしての「慣習」は、「反復」の内実にも影響を及ぼさずにはいない」（前掲書、二九五頁）とし、「反復可能性」と「慣習」概念を「重ね合わせる」方向に進むのに対して、高橋は別の論文の注記で「前者が「コード」や「コンテキスト」の概念への根本的批判を内包しているかぎり、両者の差異を強調することが重要」（『逆光のログス』未来社、一九九二年、二九八頁）と異議を唱えている。しかしこの「差異を強調する」ためには、これらの論文を見る限り、こゝで言われる「根本的批判」（『有限責任会社』における反覆可能性の、とりわけコードや慣習＝規約概念に対する関係）が実際どういふものであるのかについて、さらなる明確化が必要であるように思われる。慣習について野家の言う「歴史性」「歴史的な生成」「歴史的沈殿の所産」がいかなる含意をもつのかは別に検討せねばならないとしても、我々は以下で、反覆可能性がはじめからこうした歴史性をこそ説明するものとして持ち出されているということ、このことは「慣習」が「反復」の内実に影響を及ぼす」と対立しない（だからこそ「反復」ではなく「反復」が問われるのだが、こうしたことは反覆可能性と慣習概念を「重ね合わせる」理由にはならない）ということ、むしろ反覆可能性が示すのは慣習＝規約の根底的な不在の可能性であるということを見るだろう。実のところ『有限責任会社』の言語行為論批判は、主に意図＝志向（とそれを発言原点とするコンテキスト）のカテゴリーをめぐる主題化されており、発語内的行為の構成要件を「意図」ではなく「慣習」に見出す規約主義的立場（野家論文の主張の力点はむしろこの立場にある）への関係が見えにくくなっている。反覆可能性の概念を可能な限り一般化し、そこに含意される規約主義への批判をはっきりさせるため、以下では「不在」という語を、意図＝志向の構造における意味充実性としての現前に対立させるだけでなく、言語の機能を規整するあらゆる超越論的審級（厳密には超越論的シニフィエ）の欠如という意味にまで拡張して用いていることに注意されたい（これはどんな「不在」も同じだと言っているのではなく、各々の「不在」の機能が共有する構造的価値を問題にしているのである）。それゆえ『有限責任会社』でも述べられていないわけではないのだが（他にも例えば pp. 40 [30] 中では「記号の恣意性」が喚起されている）、私見では、より明示的な意味で、デリダ自身が「慣習＝規約」概念をいかなる仕方で問題化するのかを理解するには、『法の力』の記述を待たなければならなかったように思われる（特にそこでは慣習性が法＝権利 *droit* の側に属するものとして法 *droit* の概念から区別される。以下に示唆するように、これはいわゆる「根元的規約主義」の立場に近づくだろう）。

(8) 一見したところ「署名出来事コンテキスト」では、行為遂行性の概念は、「ある一般的な引用可能性」(44 [33])としての

- 反覆可能性に包摂されて位置づけられるべき、あるいはより一般的に置き換えられるべき「契機でしかないように思われる。実際、言語行為論の言う act (行為＝顕在態 (> active-actual-activity)) の価値は、現前の形而上学的価値を前提としているがゆえに一貫して留保されている (114 [120])。確かに「署名 出来事 コンテクスト」でデリダがエクリチュールとの関連でオースティンから直接脱構築的契機として取り上げているのは「署名」の審級である。にもかかわらず (act というより) performative をめぐって『有限責任会社』のコンテクスト的な価値を重視する我々の読解にとつて、以上の問題化は不可欠である。
- (9) ウィトゲンシュタイン・クリプキの規則論がいかなる基礎づけの含意——例えば懐疑的に取り出されたはずの言語ゲームの規則を再び生活形式や共同体的慣習といった間主観的实践様式として見出すような議論——も持つものではないということについては、最近出た次の論文が明確に主張している。井上彰「言語ゲーム論のネガティヴィズム」『相関社会科学』第九号 (1999) 東京大学総合文化研究科国際社会科学専攻、二〇〇〇年三月、四八〜六五頁。
- (10) Cf. Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, sec. 201 et passim; Saul A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard University Press, 1982, pp. 17ff.
- (11) Cf. Jacques Derrida, *Force de loi*, Galilée, 1995, pp. 29ff. 邦訳『法の力』堅田研一訳、法政大学出版局、一九九九年、二六頁以下。
- (12) デリダにはクリプキはもとより、ウィトゲンシュタインへの実質的な参照は皆無に等しいが、この構造は、『法の力』において「ウィトゲンシュタイン的」と呼ばれている以下の議論に現れる。Jacques Derrida, *Force de loi*, pp. 34ff. および pp. 50ff. 邦訳『法の力』三三頁以下、五四頁以下。いずれにせよ、我々の議論の精緻化のためには、クリプキ以後のウィトゲンシュタイン読解、ダメットによつて見出された根元的規約主義、デイヴィッドソンの解釈理論等のコンテクストのなかで、デリダの規則論・言語ゲーム論を確定してみる作業が有益だろう。まずもつて Samuel C. Wheeler, *Deconstruction as Analytic Philosophy*, Stanford University Press, 2000 また「デリダとデイヴィッドソンを扱った日本語の論文に、森本浩一「隠喩とコンテクション——デリダとデイヴィッドソンの場合」『現代思想』一九八七年五月号、九〇〜一〇四頁がある。
- (13) *Force de loi*, p. 104. 前掲邦訳『法の力』一三四頁。
- (14) Samuel Weber, "It," *Glyph* 4 (1978), p. 8. なお、サミュエル・ウェーバーはこうした理由も含め、指示代名詞は(もちろんこれはフランス語の *ça* を翻訳することで「シニョールにおけるシニフィアン」の、ヘーゲルにおける絶対知の、フロイトにおけるエスの記号「および女性形所有詞」(158n [182]) を喚起する)を *itérabilité* の略称とすることを提案している。

- (15) 豊崎光一「怪物の肖像」あるいは論争術の極点について、『クロニク』水声社、一九八九年、二五九頁。
- (16) J. L. Austin, *How to Do Things with Words*, 2nd ed., Harvard University Press, 1975. 邦訳『言語と行為』坂本百大訳、大修館書店、一九七八年。以下 HW と略記。
- (17) Cf. Shoshana Felman, *Le Scandale du corps parlant : Don Juan avec Austin ou la séduction en deux langues*, Seuil, 1980, p. 108. 邦訳『シヨシヤナ・フェルマン』語る身体のスキャンダル——ドゥ・ジュアンとオースティン、あるふは二言語による誘惑』立川健二訳、勁草書房、一九九一年、九五頁。
- (18) Emile Benveniste, "La philosophie analytique et le langage," in *Problème de linguistiques générale*, t. 1, Gallimard, 1976, pp. 273. 邦訳『E・バンヴェニスト』分析哲学とことば』岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』みすず書房、一九八三年、二六〇頁。
- (19) Ibid., p. 274. 邦訳、同頁。
- (20) フランソワ・レカナティによれば、遂行論的矛盾は、その独自の形式によって他の矛盾とは明確に区別される。「偽である通常の総合命題と論理的矛盾の中間に、遂行論的矛盾がある。偽の総合命題は事実によって矛盾するのであり、論理的矛盾はそれ自身と自己矛盾しているのだ。遂行論的矛盾はと言えば、事実によつて矛盾していると同時に自己矛盾もしているのである〔……〕。遂行論的矛盾とは、それ自身の言表行為の事実と矛盾する命題である」。François Recanat, *La transparence et l'énunciation : pour introduire à la pragmatique*, Seuil, 1979, p. 197. 邦訳『ことばの運命——現代記号論序説』菅野盾樹訳、新曜社、一九八二年、二四八頁、訳文変更。我々は、こうした遂行論的矛盾特有の種差性を認めつつも、この「矛盾」を、いっそう強い意味で——あらゆるパフォーマティヴの可能性の条件を構成する矛盾として見出している。
- (21) Rodolphe Gasché, "Setzung" and "Übersetzung" in *The Wild Card of Reading*, Harvard University Press, 1998, p. 17.
- (22) Cf. Jaakko Hintikka, "Cogito Ergo Sum: Inference or Performance?," (1962) in *Knowledge and the Known*, Reidel Publishing Company, 1974, pp. 98-125. 邦訳、ヤッコ・ヒンティッカ『コギト・エルゴ・スムは推論か行為遂行か』小沢明也訳、デカルト研究会編『現代デカルト論集II・英米編』勁草書房、一九九六年、一一―五三頁。および、レカナティ、前掲書、pp. 198ff. 邦訳二五〇頁以下。言語行為論がパフォーマティヴの自己反照的構造を見出したことによつて、それらの問題は、論理的な同型性においては、ヘーゲルの思弁的反省を頂点とする大陸哲学の主観性理論の系譜へと、つまり言語行為論が一端は断ち切ったはずの伝統的な問題系へと再び繰り込まれることになる。今世紀の解釈学や言語行為論にも及ぶ反省哲学

のこうした問題系については、ロドルフ・ガシェが論理的にも哲学的にも一貫した極めて明快な説明を与えている。Cf. Rodolphe Gasché, *The Tain of the mirror*, Harvard University Press, 1986, Part I: 'Toward the Limits of Reflection'.

- (23) それゆえに例えば「行為遂行性を、明確な起源や目的のないまま、その都度刷新しうる行動と理解することによって、発話は最終的に、特定の発話者やそれを生み出した最初のコンテキストに縛られることはなくなるだろう。そのような発話は、社会的なコンテキストによって定義されるだけでなく、コンテキストを断ち切る能力によっても記し付けられている。したがって行為遂行性には、それが断ち切るコンテキストによってまさに行為遂行性がいまだ可能になるような、固有の社会的時間性というものがある。」Judith Butler, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, Routledge, 1997, p. 40. 邦訳「シヤ・デイス・パトラー」『触発する言葉——パフォーマティヴィティの政治性』竹村和子訳、『思想』一九九八年一〇月号、四一頁。
- (24) しかもこれはそれ自身が、デカルト『形而上学的省察』第五章のタイトル「物質的事物の本性について。そして再び、神について。それは存在すること」ということを「引用」か「使用」かは宙吊りにしたまま引き合いに出したものである（かつデカルト自身のタイトルも自己引用ないし自己使用されて書かれたものであることが指摘されている）。詳しくは *Limited Inc.*, pp. 154 [149] ff°.

- (25) Cf. *La Carte postale*, Aubier-Flammarion, 1980, p. 148. デリダは「ヴェルナー・ハーマッハーの読解に促されて最近のテキストにおいてあの語を援用している」。“Marx & Sons,” in *Ghostly Demarcations: A Symposium on Jacques Derrida's Specters of Marx*, ed. Michael Sprinker, Verso, 1999, pp. 224ff.

- (26) 『有限責任会社』ではいく暗示的にしか用いられていない「おそろく」の様相をここで強調しておく必要があるのは、実のところ他方で、デリダが『有限責任会社』以降、とりわけ九〇年代のテキストにおいて、出来事の諸相（生起、到来、逢着、歴史、時間性、等々）を喚起すべくこの言葉を積極的に援用し、繰り返し練り上げているからである。そこでは「おそろく」の様相において、出来事が、待機することなく待っている地平にあつていかなる予期も超出しつつ不意撃ちするもの（たんなる未来 *futur* から区別された将来 *avenir*）として強調されている。Cf. 例えば、*Force de loi*, pp. 60ff. 前掲邦訳、七〇頁以下、および *Speches de Marx*, Galilée, 1993, pp. 62ff., *Politiques de l'amitié*, Galilée, 1994, pp. 46ff. 等々。

- (27) 本稿ではほとんど扱ったことができなかったが、とりわけ精神分析と（より具体的な）政治との接関係が改めて読まれるべきである。一方に無意識、抑圧、享楽、体内化、喪の作業……、他方に警察、裁判所、アカデミー、ジャーナリズム……、こうしたモチーフの緊密な織り合わせが、別のところでデリダが「ブラグラマトロジー」(274n; cf. “Mes chances: au rendez-

vous de quelques stéréophonies épicuriennes," in *Psyché, Inventions de l'autre*, Nouvelle édition augmentée, tome I, Galilée, 1998)と呼ぶものの間いを形づくるだろう。

(28) ド・マンがデリダに先駆けていかにしてパフォーマティヴ概念の変形と再錬成を行っていたかについては、すでに私は論じたことがある。Cf. 「約束のアレゴリー——政治としての脱構築」試論」東京大学総合文化研究科一九九八年度修士論文、とりわけ第二章「ディコンストラクティヴ、パフォーマティヴ」。

■ 本稿は、駒場哲学協会二〇〇〇年度春期フォーラム（於東京大学駒場キャンパス、二〇〇〇年四月八日）において発表された原稿をもとに大幅な加筆変更を施して再構成されたことを付記する。